
愛って「哀」のこと？「違い」のこと？

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛って「哀」のこと？「逢い」のこと？

【Nコード】

N6481Y

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

成績のTOP争いをしている涼子と哲哉。哲哉はバンドまでやっている。それなのに、成績は涼子と一緒にTOP争い中。

(某携帯サイトにて連載中のものです)

1・とりかえっこ(前書き)

双子の姉妹 涼子と麗華はある日お互いを「とりかえっこ」「する事になった。

1・とりかえっこ

成績は小学校の時からいつもTOPだった。

恋愛もOUT OF 眼中。

そして、高校生になった。

「おい、遼子。またお前かよ！」

「そう、私よ。」

廊下を歩く私に哲哉が声をかけてくる。

いつも成績争いをしている、単なるライバル。しかし、このライバルはふざけてる。

だって、授業中は寝て禁止されているバイトをして、バンドのV
O・もして……。

「サボタージユだからでしょ？」

「1点差じゃん。サボはしてないよ。」

にこり、と笑ってそう答える。

何だか、腹立つヤツ、と思っていた。

おまけに、幼馴染だなんて信じたくもない。

「お母さん！また哲哉ったら。」

部活のバスケットが終わり家に帰ると、ちょうどパートから帰ったばかりの母と会った。

「あら、涼ちゃん。」

母は夕食の荷物を玄関に、

どきっ！

と、置くと、「何、どうしたの？」

にっこりと笑って言った。

学生結婚の母だからまだ若い。

話が合うからほとんど「友達の関係。」

「で、哲哉くんが何？また、ライブでもやるの？」

私――涼子の父は海外に単身赴任中だった。「お父さんの所に送ったMD、好評だったらしいわよ、哲哉くんのバンドの。」

そう。

父は今、日本を離れイギリスでプロデューサー活動をしている。

MDは母が送ったらしい。

「何ー？またお姉ちゃん怒ってるの？」

2階から声がした。「また、哲哉の事でしょう？」

パタ　パタ　パタ

と、階段を降り、妹の麗華が降りて来た。

顔は涼子と瓜二つ。

双子の妹だった。

「何で、哲哉の事って判るのよ。」

涼子は母の荷物を持ちながら広いリビングへと入った。開け放たれた窓の隙間から初夏の風が流れ込んで来る。

「そりゃ、双子だもん。」

麗華も荷物運びを手伝いながら、「お姉ちゃんの思ってる事なん

てすぐ判るわよ。」

「それより、宿題は終えたの？麗華。」

「まだー。」

麗華はのんびりと今夜の夕食の材料を眺めながら、「今日はボルシチかな？お母さん。」

「そうよ。涼子も麗華も好きでしょ？」

黒いスーツ姿の母がにつこりと笑う。

「話をそらさない！」

涼子は麗華の頭をこづいた。「また貴方点数悪かったんでしょ？期末テスト。」

「あちゃー、バレたか。」

悪びれた様子もなく、妹は答えた。「ってかさ、お姉ちゃんの方が頭いいんだもん。」

「S大狙ってるからね。」

「国立でしょ？私は無理だなー。」

「あんま無理無理って諦めないの。ちょっと双子の麗華の成績貼り出される度に、哲哉がごちゃごちゃ言ってくるんだから、どうにかしてよ！」

「ふーん。」

親のコネ、とか言われたくない。

そう思って音大で有名なS大で指揮者を目指している涼子だった。

「涼子も駄目よ、あんま勉強、勉強つて。」

母が夕食の用意をしながら、「普通高校生とかいったら恋の一つもしているものよ。」

スーツからエプロンドレスに着替えた母は、

「私は学生結婚だったし、好きなフルートも今は地元の吹奏楽団だけど休みの日にはやらせてもらってる。平日はお父さんの代わりに2人の面倒を見て、休日は好きなフルートをやらせてくれる――」

「涼子も麗華もそういう人早く見つけなさい。行き遅れになるわよ。」

「行き遅れ……。」

「極端すぎ……。」

キツチンに入った母の背に問いかける2人だった。

るるる　るるる　るるる

深夜。

涼子の携帯が鳴った。

「ん……何よ、こんな時間に。」

午前1:00まで机に向っていてやっと床に付いたばかりの涼子。

「もしもし。」

『俺、哲哉。』

スマートフォンの声の主はそう告げた。

「何よ。一体何時だと思ってるの?」

『お前だから今も起きてるだろうと思って』

と、哲哉は『これからライブの打ち上げがあるんだけど来ない?』

「行かない。」

涼子はびしつと言った。「そんな事してるから私に試験で負ける

のよ。」

『今度は負けやしないよ。』

声の主は断言した。『秋の間ではTOPは俺がとって、ペリは

麗華にとって貰う。』

「まだ、先の話じゃないの。」

寝ぼけ眼で涼子は長い髪をかき上げた。

「夏もライブやるんでしょ?」

『ああ。お前のお父さんからいい話貰ったしね。』

「いい話?」

『そう。MD聴いてくれてさ、イギリスに来て本気でやらないか、

って。』

「え………。」

涼子は急に目が覚めた。「イギリスって……」

『そう、イギリス。』

哲哉は嬉しげに、『イギリスの音大に推薦入学させてくれるって。』

「………。」

胸が。

熱くなる。

「………マジ？インディーズでしょ、まだ。」

携帯の向こうで哲哉が、

『そうだけど、音大卒業してやる気があるならプロデューズしてくれるって。』

「………。」

『夏はちよっとお前のお父さんのトコにホーム・ステイさせてもらおう。』

月は満月だった。

高校に入って3年が過ぎていた。

2人とも、進路を決める時期である。

『お前はS大で指揮者目指すんだろ？』

「うん。」

『俺はイギリスでメジャー・デビューを目指す。』

「………悪い、哲哉。」

固まった声で、涼子は言った。「ライブの打ち上げにも行けないし、貴方の夢物語聞いている場合じゃないの。S大絶対入るんだから。」

『そっかー。』

哲哉は少し残念そうな声だった。『じゃ、また明日学校で。』

「うん、学校でね。」

ブチッ

そこで会話は終わった。

涼子は暫く茫然とした。

いつも側にいた哲哉が遠くに行ってしまう。

目指す道は結局同じ音楽だったのに……

最後の夏休みには哲哉がいない。

コン コン コン

「入るよ、お姉ちゃん。」

双子の妹の麗華が隣の部屋から壁を叩いて、声をかけた。「そっち、行ってもいい?」

「うん、うん、いいよ、麗華。」

涼子はスマートフォンを慌ててピンクの枕の下に隠した。麗華はそっと部屋に入って来た。

「隠しても無駄だぞ。」

涼子の映し鏡でもあるかのような麗華は、髪をかき上げ、「今、哲哉と話してたでしょ。」

「何、聞こえたの?」

私はびっくりした。「とっくに寝てると思ってた。」

「うん、ちよつと良いこと考えてたの。」

麗華は言った。「私ね、哲哉の事好きなの。」

「はあ?」

突然の台詞に涼子は目を丸くし、「いきなりどうして??」

「でね!」

麗華は涼子のベッドに近づき、耳元で囁いた。「とりかえっこしない?」

「何を。」

「麗華と」

と、自分を指差し、それから涼子に指をさす。「お姉ちゃん。」
「全然、訳判らないじゃない。」

「早い話が麗華がおねえちゃんになって、お姉ちゃんが麗華になるの。」

「え……」

深夜の密談が続く。「たぶんね、お姉ちゃんも哲哉の事好きだよ。でも、私も好きなんだよね。」

「だから、哲哉は私の『ライバル』だけのこと。」

「そうかなー？」

麗華はふふふ、と笑いを浮かべ、「たぶん哲哉も涼子の事好きだと思うよ。」

「何で、あんな奴が。」

「だって。」

麗華は静かに、「学校で声をかけるのはいつも私じゃなくてお姉ちゃんの方だもん。こんなに似てるなら、廊下ですれ違った時とか試験の結果が貼りだされた時、間違えたりするのが普通でしょ？」

「……」

そう言われてみれば。

成績は最低だったけど同じ高校に入った麗華。哲哉は麗華とはあまり話す事はない。

話しかけるのは、いつも……

「ってか。」

涼子はいつの間にか、麗華の話にのっていた。

別に好きとか嫌いとかいう問題ではなくて。

「明日から私が涼子になる。私、これでも演劇部だから演技は得意よ。まして、双子のお姉ちゃんのお真似なんて100%出来る自信あるわ。」

「とりかえっこしてどうするの?」

私は麗華に近づいた。

麗華も私に近づき、

「お母さんも言ってたじゃない。恋の一つでもしなさいって。だから、哲哉が私を選ぶかお姉ちゃんを選ぶか、やってみるの。」

「はあ。」

涼子は眠気と共に、呆れた溜息を付き布団にもぐりこんだ。「そんな事出来る訳ないでしょ。これだから成績落ちるのよ。」
白い羽毛布団を頭まで被る。

「ね、約束。明日から私が涼子よ。」

「はい。おやすみなさい。」

私は、ぱたぱたと手を振り、睡魔に勝てず眠りについていった。心の中では、ずっと哲哉のイギリス留学とS大の試験がぐるぐると廻っていた。

気がつくと、目ざまし時計は最大の3ランクの音を立てていた。

「寝坊!？」

涼子は慌てて飛び起きた。「……ったく、哲哉ったら!深夜に電話してきたり麗華も麗華よ。」

ぶつぶついいながら、壁にかけておいた制服に慌てて着替える。
ふと。

「あれ?」

何か、違うような気がした。

「涼ちゃん、起きた!?!遅刻よ!」

階下から母の声が聞こえる。「麗華はもう出かけたわよ!」

「麗華に先を越された!」

ぱたぱた、つと階段を降り、野菜ジュースを飲むとパンを口にくわえ、「行ってくる!」

鞆を右わきに抱え、家を後にした。

キーン コーン カーン

始業チャイムが鳴る中、涼子は慌てて教室に飛び込んだ。

「すみません！遅刻しちゃって。」

担任の教師が目を丸くする。

そして、クラスメイトも。

やがて。

涼子の荒い息も気にせず、皆が笑い出した。

「何言ってるのよ、麗華。」

クラスメイトのさやかが言った。「寝坊してクラスまで間違えるなんて。」

「そうよ。麗華。」

『涼子』が言った。「貴方のクラスは隣。」

「はあ?？」

涼子は余計目を丸くした。「麗華、何で貴方が……」
と、まで言っってはっ、と気付いた。

『お姉ちゃんと麗華とりかえっこしない?』

白いシュシュを首元に束ねた髪に付けた麗華……ではなく、今は涼子。

クラスメイトもみんなそのシュシュが、一卵性双生児の涼子たちを区別する目印。

涼子は慌てて来たからシュシュの事なんか忘れてた。

つまりは。

今、涼子は麗華なのだ。

「す、すみません……」

半分上目づかいで麗華を睨みつける。

既に、その演技力でクラスメイトを『悩殺』してしまったらしい。

「ほら、授業始めるぞ！」
若い担任の先生が目の前で部屋の戸をしめる。

ガツン

涼子はこの白い扉に頭をぶつけた。

「何で？」

確かに、哲哉を麗華が好きで涼子も哲哉が好き……って、
「勝手に決め付けないでよ！」

頭を戸につけたまま、涼子は恨めしげに言った。「哲哉は私の成績上のライバル。本当に何とも思っていないんだから。」

ぶつぶつ言いながら、仕方なく隣の教室に入る。

「井上。また、遅刻か。」

「はい。遅刻です。」

担任の声に小声で答えながら、涼子は麗華の席に座った。

「ま、いつもの事だけだな。丁度いい、昨日の宿題黒板で解いてみる。」

「はあ??？」

涼子は慌てて鞆をあさった。

鞆の中身は携帯以外、全て麗華のものだった。

もちろん、涼子が麗華の宿題など知る訳がない。

見覚えのある隣の女子生徒に、

「何だつたつけ？」

「日本史のBよ。」

彼女は素直に教えてくれた。麗華はいつもこんな調子なのだろう。

「えつ……と。」

ノートの間にはさまった白い紙を持ち、涼子は席を立った。

「1182年……」

ノートにはそれしか書かれていない。

何よ、これ！！宿題やってない証拠じゃない！私に急に振られたって判らないじゃない！

涼子は怒髪天の如く怒り、

「平徳子が健礼門院となる……」

と、口の先まで出かかつて、

（やばっ！！私、今『麗華』なんだ！）

「何か言ったか？」

担任の先生の声が聞こえる。

この宿題を答えたら、涼子が涼子だって事がバレるが。

プライドがー！ーっ！！

成績TOPのプライドがー！ーっ！！

涼子の心の中を嵐が通り抜けた後、涼子は諦めて一言。

「はい、先生、『いいパンツ』です。」

教室中が笑いに包まれるのは当たり前的事。

涼子は心の中で思った。

（麗華めー！覚えておいで！いつか反撃してあげるから！！）

昼休み、廊下をどかどかと歩く『麗華』の姿があった。勿論、それは『涼子』本人である。

自分の教室を通りこして、カフェ・テラスへ行く。

涼子達が通う学校はクリスマスチャンで、校庭の手前に昼食を取るように白いカフェ・テラスが用意されていた。

涼子は麗華といつもそこで食事をしていた。

「ちよつと、麗……」

まで、人混みの中で言いそうになり、慌てて口を押さえる。

いつもの席には今は『涼子』となった麗華が哲哉と食事をして
いた。

「あ、麗華ちゃん！」

哲哉は隣の『涼子』と一緒に振り返った。

「遅かったじゃない、”麗華”。」

天使の笑顔で麗華が微笑む。

実は。

「1182（いいパンツ）」解答を先生に突っ込まれ、今まで職
員室に呼ばれていたのである。

むろん、涼子が職員室に勉強の事で呼ばれる事などなかった。

（勉強に関しては）エベレストより高いプライドを持つ涼子が腹
を立てるのは当たり前。

が。

今は、涼子は麗華である。

哲哉の前で、怒髪天を現わす事は出来なかった。

「う、うん。」

涼子は固い笑顔で、「ちょっと進路の事で先生に相談しようかな
ーって。」

と、麗華の隣に座りテーブルの下で指で彼女の太ももをつねった。

「痛っ！」

麗華が思わず声を上げる。

「どうしたの？涼子。」

哲哉が目丸くする。

涼子と麗華はしかめっ顔をお互い見せ合い、やがて、にっこりと

「何でもないよ。」

「そう、何でもないよ。」

哲哉に気付かれない様に、テーブルの下で足の小競り合いをして
いた。

「って、哲哉。」

麗華（本人）はにっこりと笑って、

「今度の夏休み、私のお父さん所に行くって本当？」

「ああ。決めたんだ。」

哲哉はサンドイッチを食べながら、「ほら、涼子も俺とは違うけど同じ音楽の道に進むだろう？だから、俺も本腰入れようと思って

ずきんっ！

涼子の心の中でまた、熱い何かが走った。

何故かは判らない。

その話しを聞いた時も、胸が熱苦しくなったのを涼子は覚えていた。

「じゃ、私もお父さんトコ行こうかな？」

足の蹴り合いを終えた麗華が涼子の表情で言う。

「珍しいな。」

哲哉は言った。「いつもなら、『無駄に決まってるじゃない』とか言うくせに。」

「そうかしら？」

涼子の表情で麗華は涼しげに言った。「単にお父さんに会いたっていうのもあるし。ね、”麗華”。」

「う、うん。」

涼子本人は胸の鼓動を押さえきれず、サンドイッチをドカ喰いしてた。

胸をとんとんと叩き、ブラック・コーヒーで流し込む。

「それ、いいかもね、”お姉ちゃん”。英語の勉強にもなるしね。

必死に麗華を演じる涼子。

「麗華も行かない？」

と、『涼子』。

「って、私は……。」

暫く哲哉の顔を見つめていた。
胸の鼓動が止まる。

「…行ってもいいけど。」

(何だったんだろう、あの熱い思い。)

涼子は半分うわの空だった。

熱くなったり、どきどきしたり…

こんな事、今まで無かったのに。

麗華は哲哉と笑顔で話しをした。
でも、先刻の胸の熱さは無かった。

『哲哉だって、お姉ちゃんの事好きだと思っよ。』

昨夜の麗華の台詞。

だが、やっぱり成績上でのライバルとしか涼子は哲哉の事を思えない。
ない。

なのに、何故。

『同じ音楽の道を進むから』

先刻の哲哉の台詞が甦る。

そうするとまた、胸が熱くなる。

「どうしたの？麗華。急にだまりこんで。」

”涼子”が言った。

「別に。」

コーヒーをもう一杯注文しながら、涼子は考えていた。

（同じ道を進むからライバル？成績でも競いあうからライバル？）

だから。

胸が熱くなるのか？

初夏の風が涼子と麗華の長い髪を揺らした。

と、その風の勢いで”涼子”の白いシュシュがとれてしまった。

「おっとー。」

哲哉はそれを拾い、「はい。ちゃんと大切にな。」

”涼子”に手渡した。

「本当に」

と、哲哉は続け、「それが無いとお前たちどっちがどっちだか幼馴染の俺でも判らないよな！。」

ぼやー、と呟いた。

涼子と麗華は顔を見合わせた。

性格も成績も全然違うのに、姿形は一緒。

1・とりかえっこ(後書き)

ぼちぼち純恋愛物語です。

2・白いシュシュ（前書き）

哲哉は小さい頃、白いシュシュをどちらかが付けると言った。

2・白いシユシユ

『おい。お前ら見間違うから、どっちかこれ付けてろよ。』

そう言っつて、哲哉が白いシユシユを涼子と麗華の前に差し出したのは、小学生の頃。

「同じ?」

麗華が首を傾げる。

「同じっつて?」

涼子も目を丸くする。

「同じ、って同じだからさ。」

哲哉はそっぽを向いて答えた。「中身まで同じかもしれないだろ? そっしたら、余計どっちが涼子でどっちが麗華か判らなくなる。」

「……」

「……」

2人は顔を見合わせ、やがて、

「違うよ。」

そう言っつたのは麗華だった。「私とお姉ちゃんとは違うよ。」

「同じだよ。」

哲哉は、ぼけーっと、「好きなアイスは2人共ラム・レーズン。

好きな色は白、好きなアーティストは○○。同じじゃん。」

確かに。

小さい時から涼子と麗華はいつも一緒に喧嘩もした事ない。

休みの日には2人の父が弾くピアノで唄をうたっていた。

キーも同じ。

何度、『ハモリ』を父がさせようとしても、いつの間にか、同じキーになる。

仕方無いから、哲哉と母が『ハモリ』役となる。

「だからさ、どっちかこれ付けて俺だけには判る様にしておいてよ。」

差し出された、白いシュシュ。

「じゃ、お姉ちゃん、付けて。」

幼い麗華はにっこりと笑って素直にそう言った。

「哲哉からのプレゼントだよ、お姉ちゃん。」

「麗華……。」

涼子はそんな麗華に言葉を失った。

その日から、涼子は白いシュシュを付けるようになった。白だからすぐ汚れても、次に買うのは同じ白のシュシュ。

そして、10年が過ぎた。

家に帰る途中で、隣の麗華が、

「ね。完璧でしょ？私の演技。」

そう言って、自分の髪に付けていた白いシュシュを涼子に手渡す。

「はい、お姉ちゃんの。」

「う……ん。」

戸惑いながら、夕闇の街の中でそれを涼子は受け取った。

心の中に一つの疑問が浮かび、それを麗華に尋ねようとして、

「あのさ、麗華……。」

「そう言えばさ。」

性格的には少し活発な麗華が明るく言った。

「お姉ちゃん、帰ったらあれ食べたいでしょ？」

「あれって？」

「今、ちょこっと帰りに食べたいって思ってたあれ。」

麗華は悪戯げに言った。

「当ててあげようか？」

「うん。」

「お母さんが買って来てくれたアイス。今日は『ナッツ・ツリー』って気分ですよ。」

「はい？」

涼子は目を丸くした。「何で判るの？」

メールで涼子と麗華の母が遅くなると知った彼女たちは、お風呂に入りながら、『ナッツ・ツリー・ユー』を食べていた。

「お母さんがいない時しかこんな事できないよねー。」

アイスを舐めながら、麗華が言くと、

「そうだね。2人の秘密みたいなものだよねー。」

涼子も満足気にお風呂の中で両足を踊らした。

「おいしいー！」

「マジっこだよねー。」

2人共、満足気だった。

「でもさ」

ふいに涼子が言った。「何で『あの時』麗華は私に哲哉からのシユシユをくれたの？」

「うーんとね。」

アイスを食べながら、麗華は「何となくー。」

「何となくー？」

涼子もアイスを舐めながら、「だって麗華は哲哉の事好きなんですよ??」

「ずっと一緒にいるし、お兄ちゃんみたいだもん。」

麗華は答えた。

「お兄ちゃん？」

「うん。だから、付き合うならお兄ちゃん的な所の方がいいじゃん?」

ルルル、と鼻歌交じりに彼女は答えた。

「お兄ちゃんね……」

ザバツ

アイスを食べ終えた涼子は先にシャワーを浴びに浴槽から出た。

シャーツ

ぬるめのお湯を頭からかぶる。

今年も猛暑になるのか、もう外は夏真っ盛りの様子だった。

腰まである長い髪をシャワーのお湯にさらし、

「麗華。」

「何？」

近づいて来た麗華に涼子は声をかけた。

「哲哉ってさ、私たちの事本当に同じって思ってるのかな。幼馴染なの。」

「染なのに。」

「どうかなー。」

麗華もシャワーを浴びる。「小さい頃はお父さんもお母さんも間違ってたからね。」

「ま、確かに。」

「涼子は溜息交じりに、」

「でも、性格は全然反対だと私は思うよ。」

「そうかなー？」

ミントのシャンプーで髪を洗いながら、

「好きなものも好きな食べ物も一緒なの？」

「成績が違うでしょ？」

涼子は呆れた様に言った。「貴方は学年最下位。私はTOP。」

「何で、そんな成績に拘るの？お姉ちゃん。」

麗華が問いかけた。

「だって、成績まで同じだったら私たちまるで一緒じゃない。」

「そうかなー。」
「そうだよ。」

キユッ

シャワーの蛇口を止めると、涼子は先に風呂場から出た。

『同じ』って思われなくなかった。

ピンクのバスタオルで髪から体からのお風呂の滴を拭いながら、涼子は思っていた。

いつでも、一緒にいる麗華が嫌いな訳じゃない。

ただ、哲哉には『同じ』って思われなくなかった。

好きとか嫌いとか言う感情じゃなくて。

何て表現すればいいんだろう。

涼子は思った。

間もなく麗華も風呂場から出て来た。

「あ。この間、私を買ってあげた縞馬の下着だー!!」

麗華が涼子のその姿を見てはしゃいだ。

「好みじゃないかとも思ってたけど。」

「うん？それでもないよ。」

涼子は答えた。「たまにはこういうのもいいって思ってる。」

「色違いの『おそろ』だよ、お姉ちゃん。」

バスタオルを羽織ったまま、麗華は自分の下着を見せた。

「私のはキリンみたいな黄色の縞模様！」

「やっぱ、同じなのかなー。」

涼子は天井に視線を向けた。

双子って特に一卵性双生児は似てるって言うけど… …

じゃ、好きになる人も同じタイプなのかな？

「ねえ、昼間言ってたイギリスのお父さんの所へ行く話。」

下着をつけながら、麗華が言った。「私は本当に行くよ。」

「どっぞ。」

涼子は相変わらずだった。「私は夏のゼミに行くから行かないよ。」

「えー、何で？」

麗華は涼子の腕を掴んだ。「一緒に行こうよ。」

「やめとく。」

ルーム・ウェアに着替えた涼子はあっさりと言った。「これ以上同じって思われたら嫌だから。」

そう。

子供の頃は気にしなかった。

双子で仲がいい。

何も言わなくても、お互いが判る。

だけど、いつの間にか涼子は麗華と違う人間になりたかった。

だから、勉強を精いっぱいした。

すると、哲哉まで勉強を始めた。

麗華は相変わらず、お父さんっ子で日曜日や休みの日はコンサー
トに出かけるか、遊園地に出かけるか。

いつの間にか、涼子と麗華は変わって来ていた。

相変わらず好みも利き腕も同じ左手だが、涼子はいつしか父のよ

うな指揮者になりたいと思っていた。

じゃ、麗華は将来、何になりたい？

2・白いシヨシヨ（後書き）

恋愛小説は苦手ですが（＝＝）

3・樹(いつき)(前書き)

「とりかえっこ」をしている涼子の前に哲哉と同じバンドのメンバー、高橋 樹が現れた。

3・樹(いつき)

ある日の事だった。

「井上、俺と付き合わないか？」

麗華のクラスメイトの高橋 樹いつきから、麗華として今はいる涼子は告こくられた。

「はい？」

涼子は目を丸くした。

樹は哲哉のバンドでG・r・を担当していた。

「あの……」

私、麗華じゃなくて涼子なんですけどー。

シユシユをしてない涼子に突然現れた恋人候補。

「あ、あの……」

涼子は焦った。

勉強ばかりで告白など縁のない涼子である。

麗華はどうやらクラスでは、男友達も作っているらしい。

「駄目？」

樹は首を傾げた。

「いえ、その……」

涼子は麗華の笑顔を見せ、「ちょっと、今お手洗いにいきたいから返事はその後でいい？」

「ああ。」

樹は微笑し、「屋上で待ってるよ。」

「ありがとう。」

それだけ言うと、涼子は女子トイレに駆け込んだ。

そして、中に入ると携帯を取り出した。

「もしもし、麗華？」

幸い、昼休みも終わりかけ人は誰もいない。

『何？お姉ちゃん。』

「ちよつとね、高橋 樹って貴方のクラスメイトに告白されたのよ、どうしよう。」

『ええ？あのイケメン君に？』

「イケメン君？」

『そうよ、お姉ちゃんもそう思うでしょ？クラスの女の子の彼氏にしたいNo.1の男子生徒よ。』

「はあ。」

涼子は溜息をついた。

涼子が麗華としてクラスに入ってから、徐々に彼女のクラスの事は判って来たが、イケメンが誰かとかまでは探りを入れてなかった。

「つて。どうすればいい？麗華。」

電話の向こうで麗華はくすくすと笑い、

『付き合ってみたら？お姉ちゃん。』

「え”!!!」

涼子は目を丸くした。「だって、樹くんは麗華に告白してるのよ。」

『バレない、バレない！』

麗華は断言した。『お母さんも恋愛の一つもしてみなさいって言うてたじゃない？向こうから告られたらもって他のチャンスじゃない？』

「でも、さつきも言った通り、貴方に告白したのよ。」

『私だったら、お友達として、って答えるよ。』

「そっか……」

その手があったか。

涼子は頷き、

「そうだね。友達としてならいいよね。そんな深い関係になる必要もないし。」

『そうそう！当たって砕けるってよく言っじゃない。』
「……。」

涼子はトイレの白いタイルの天井を見上げた。

当たって砕けるのはどっちよ。

『とりあえず、OKって事にしておいて。じゃ、切るから。』

「うん。」

涼子はスマートフォンを切った。

「当たって砕けるのはどっちだと思ってるのよ。」

溜息を付きながら、涼子はトイレを後にし、残り少ない昼休みに樹が待つてる屋上へと向かった。

涼子は残り少ないお昼休みを使って、屋上で待っている樹の元へと向かった。

樹の事は哲哉から聞いている。

元々、哲哉がヴォーカル（V o .）をつとめるこの4人組バンド『V・a R o k k』は哲哉と樹が中学の時に始めたバンドだった。

中学に入った時、音楽の事で偶然入学ガイダンス中に盛り上がった樹がアコースティックで、V o . が哲哉、そして高校に入り、雄二と司がベースとドラムで加わり形になったものだ。

樹もアコースティックからメインG r . のエレキにギターを持ちかえた。

地元でも中学でも路上ライブなどを行い結構名の売れた哲哉と樹だったが、それに雄二と司が加わり、今の『V・a R o k k』となりインディーズでデビューをしている。

高橋 樹。

バンドのサブリーダー。

性格は温厚、勉強も涼子並、運動神経も抜群で時々バスケット部から

「助っ人」を頼まれる時もある。

彼女がいるかどうかは不明だが――

『麗華』に告白したという事はまだ彼女無しという結果になる。

涼子は彼女を待つ、樹の前に立つと、

「あのー。私『井上麗華』の方なんですけど、それでも付き合いたいって言うんですか？」

「何、改まつてるんだよ。」

樹は明るく笑った。

確かに、イケメンである。

「お前以外に麗華が何処にいるんだよ。」

「例えば、双子の姉の涼子の方と間違えてるとか。」

「間違える訳ないだろ？3年間同じクラスにいて。」

「そ、そうね！」

涼子はドキドキしながら、

（何て環境で勉強してるんだ！雄二君も確か同じクラスで、司君はF組で……）

頭の回転を素早くし、また、表面では『麗華』を装う。

「えつとー、お友達としてから。」

涼子にはっこりと麗華の笑顔で右手を差し出すと、

「じゃ、OKね。」

樹はためらいもなくその手を優しく握った。

クラスの授業に戻った涼子は、肩越しに後ろに座る樹を見つめた。

樹は笑って手を振っている。

「おい、何だよ！」

樹の後ろの席の雄二が樹をつつく。「誰に手を振ってたんだ？」

「ん？井上。」

小声で樹は雄二にそう答えると、

「えー！ー！？？お前、あんな天燃ボケの子が好きなのか？1
182……」

パシッ

その途端、雄二の顔面に涼子の靴が飛んで当たった。

（そっか。麗華はこのクラスでは『天燃ボケ』と男子からは思われてる訳ね。）

投げ返された靴を受け止め、涼子は思った。

（じゃ、私のクラスのように勉強しなくても、男子からは一目置かれてる存在って訳。）

涼子は一人、くすくすと笑った。

（ここじゃ、お母さんが言った通り恋の一つも出来そっね。）

と、そこまで考えて涼子ははた、と思考を逆回転した。

（って言う事は、このクラスは私みたいに国立目指してるクラスじゃないから、勉強が遅れる！！）

「がーん……。」

涼子は一人、頭を抱えた。

と、反対の麗華は涼子がやった宿題と質問対策ノートを片手に『

優秀な涼子』を演じていた。

「はい。それは一条天皇です。」

「正解。」

先生も当たり前前のように涼子の解答に答える。

「次、鈴木。」

授業はすらすらと進み、麗華も見事に涼子を演じていた。

麗華の机の上に突然、教師の目を盗んで小さな紙飛行機が飛んできた。

「ん？」

開いた紙にはこう書かれていた。

哲哉からだった。

『今夜、ライブだけど来ない？』

麗華は内心、

(行く、行く！！)

だったが、残念なことに今は見事な涼子を演じなければいけない。

(駄目。)

哲哉に向かって、両手で「ばってんこ」を作った。

母からも高校卒業まではライブに行くのは禁止されている。

父が海外にいる以上、それも母としての義務だった。

(あー、行きたいな、哲哉のライブ。)

麗華は天井を見上げた。

インディーズのCDは全部持っている。

(誰よりも近く存在なのになー。お兄ちゃんみたいで、優しくて。)

授業を上空で鉛筆を弄びながら考える。

）
（あー。今日、帰ったらお姉ちゃんと、ラム・レーズン食べよう。）

その時、涼子も授業も終わりに近づき、

（大会が近いから放課後練習延長かな？）

内緒でスマートフォンをいじる。

麗華宛てである。

（今日、練習遅くなるから先帰ってて。それで終わったら一緒にラム・レーズンでも食べよう！）

3・樹(いつき)(後書き)

不定期です。

4・ラム・レーズン（前書き）

結局、樹とデートをすることになった涼子。ところが… …

4・ラム・レーズン

「ラム・レーズン、3つ下さい。」

渋谷のアイス専門店で樹は店員にそう告げた。

「はい。かしこまりました。」

「いえ、一つはチヨコ・ミントで。」

樹が『麗華』である涼子に告白したその週末の土曜日、樹と涼子はデートをしていた。

そのはずなのに。

隣には何故か雄二の姿。

「お姉さん、ヨロシクネ！チヨコ・ミントダブル」

何故か、はしゃいでいるのは蛇足的雄二だった。

「何でお前まで来るんだ、雄二。」

普段は温厚な樹がアイスを涼子に渡しながらかめっ顔で言った。

「だって、俺だって」

チヨコ・ミントダブルを舐めながら雄二は気にした風もなく、「

井上の事、狙ってたんだぜ。」

そう言いのけた。

動揺したのは涼子の方だった。

(えええ？？麗華ってそんなモテモテだったの？)

雄二は続ける。

「姉きの涼子さんは頭良くてちょっと型物っぽいだろ？」

(をいっ！！)

「だけど、麗華の方は何かドジで守ってあげたいって感じがするんだよねー。」

(悪かったわね!!)

涼子は上目づかいでラム・レーズンを口にした。

本場、フランスのアイスだが日本のそれに比べてラム酒が利いている。

それを涼子は舐めながら、

「そうなの？知らなかったー。」

と、言って足で雄二の脛を蹴った。

「痛っ!!何すんだよ。」

「あーら、ごめんねー。」

涼子は麗華の笑顔で、「ちよつと躓いたの。」

「しょうがないヤツだな、雄二は。」

困り果てた樹は、「仕方ないからスカイ・ツリーでもこれから見に行くか。」

「それいい、それいい!!」

雄二ははしゃいだ。

「何でお前がはしゃぐんだ、雄二。」

樹の表情がまたきつくなつた。

(そっかー、私のクラスでもカップルはいるけど同じ大学に行くって子が多いし。)

スカイ・ツリーの展望台から眼下を眺めながら涼子は思った。

(違う大学に行くかもしれないけど、それは「別れ」とは違うん

だ。
)

涼子はぼんやりとそう考えていた。
さっき、新宿で食べたラム・レーズンのすっぱさがまだ口の中に残っている。

(じゃ、私と哲哉はどうなんだろう。)

『イギリスでメジャーデビューだ。』
哲哉の台詞。

『同じ音楽の道を進むから。』

急に、胸が苦しくなった。

小さい時からいつも音楽と哲哉は一緒だった。

そして、双子の妹の麗華も……

それが、この夏を境にして変わろうとしている。

涼子はそんな気持ちがあった。

(みんな、違う方向へ進むのかな?)

「どうした、井上。」

無言の彼女に樹は尋ねた。

「ううん。」

涼子は頷き、「みんなこの高校卒業したら、バラバラになっちゃうのかな、って。」

少し寂しい気がした。

麗華とお風呂でアイス、なんて事もなくなるのかな……。

「そんな事ないさ。」

自信あり気に雄二が答える。「麗華もV・a R o k kヴァロックのファンの一人だろ。お母さんが許してくれないからライブには来れないけど哲哉がいつも新曲出来る度、CDをプレゼントしてるだろ？」

「うん。」

「だから、俺たちはずっと音楽を通じて繋がってるんだ、何処にいても。」

「そうだよ、井上。」

樹は微笑した。「だけど、ただの1ファンにしくなかつたから、俺はお前と付き合いたいって思ってたんだ。」

ズキッ!

涼子の胸が痛んだ。

(私は『麗華』じゃなくて『涼子』なのに。)

「あの……さ、実は。」

涼子がそう言いかけた時、

「あ、あそこー!」

雄二が外を指差した。「虹じゃないの?七色だぜ。」

「本当だ!」

樹も窓辺に近づいた。「虹を雲の上から見ると、

と、涼子に振りむき、「いい光景じゃん?井上。」

「そうだね。」

涼子は微笑した。

(もう少し、私も麗華でいよう。せめてこの夏が終わるまで…)

そうしたら、自分は実は涼子だと樹と雄二に言おう。
2人とも、こんなに麗華の事を思ってくれてる。

(麗華は哲哉に私たちのどちらかを選ばせるって言ってたけど、
選ぶのは麗華、貴方の方よ。)

くすくす、っと涼子は笑った。

(こんなに、貴方の事を想ってる人がいるんだもん。)

「何だ、井上。」

一人笑みを浮かべっぱなしの涼子に雄二が、怪訝そうに尋ねた。

「やっぱ、お前って本当の『天燃ボケ』だったのか？ラム・レーズ
ンのアイスで笑い転げるなんて。」

「そうよ。」

涼子は笑って言った。「その『天燃ボケ』が私の”とりえ”なの。」

虹はまだ輝いていた。

「どうだった？お姉ちゃん、高橋 樹君。」

母との夕食後、シャワーを浴びて来た麗華が涼子の自室を訪れた。

「ん？」

先にシャワーを浴びた涼子は髪を白いタオルで拭きながら、「い
い人だよ。」

「いい人でしょ。」

麗華はにっこりと笑った。

「でも、樹君は麗華の『天燃ボケ』の所が好きで告白してきたみ
たいだよ。雄二君も。」

「うん……ね、お姉ちゃん、ラム・レーズンのアイス持って来

たから一緒に食べよう。」

と、目の前に差し出す麗華。

「そうだね。」

涼子は1個受け取り、代わりにタオルを麗華に渡した。「髪、拭いて。ちゃんと。」

「うん。」

麗華はアイスを舐めながら、片手で髪を拭いていた。

「で、お姉ちゃん、本当は自分が涼子お姉ちゃんだって事、言うつもり?」

「ううん。」

涼子もアイスを舐めながら、「それは麗華、貴方が決める事だよ。さっきも言った通り、樹君も雄二君も麗華だから好きなんだよ、私の事。」

「そう。」

麗華は小首を傾げた。「私はもう少し、”とりかえっこ”のままがいいな。」

「哲哉と一緒にいれるから?」

「それもあるけど」

と、アイスを舐めながら麗華は、「お姉ちゃんには勉強以外の何かを見つけて貰って、先に彼氏を作ってもらいたいんだ。」

「どうして?」

「お兄ちゃんが欲しいから。」

「ふーん……お兄ちゃんか。」

「そう、哲哉みたいだな。」

「でも、哲哉は私の成績上でのライバルだし。」

「そこ!」

麗華はびしっ、と涼子を指差した。「お姉ちゃんってすぐ成績ななんだもん。それがいけないな。」

「悪い?私、哲哉よりいつでも上にいたいもん。」

涼子もアイスを舐めながら、そう答えた。

麗華はじつと彼女の姿を見つめ、それから言った。

「もしかして、”かかあ殿下”狙ってるとか？」

「それも違うよー。」

涼子は麗華をこづいた。「貴方は早く、樹君にするか雄二君にするか、それとも哲哉にするか早く決めなさい。夏はあつという間に終わって恋愛どころか、進学競争まっしぐらだよ。」

「あー、それもあるのよ！」

と、麗華は涼子に両手を合わせお辞儀をした。

「真面目に勉強するから、もう少し、”涼子お姉ちゃん”でいさせて。」

「困ったねー。」

アイスを舐めながら涼子は天井を見上げた。

『虹だ！』

雄二と樹と一緒に見た虹の色は、何処か、今食べているラム・レーズンのアイスの色に似ていた……。。

4・ラム・レーズン（後書き）

某携帯サイトにて掲載のものです。

5・司(前書き)

ついに、涼子と麗華の「とりかえっこ」が哲哉にばれる瞬間が来たのか？

5・司

授業が終わった所だった。

3年F組の新藤 司がB組の哲哉の教室に姿を現した。

傍らの”涼子”である麗華に少し視線を飛ばして、

「おい、哲哉。樹と雄二が井上と恋愛沙汰になってるらしいぞ。」

「そう。」

哲哉は動じた風も無かった。

「そう……って。」

司は”涼子”に冷たい視線を向け、「これから大事な時なんだ
ぜ、V・aRokk。」

「そう、大事な時だよ。」

と、哲哉は司とは正反対の優しい視線を”涼子”に向け、「だから、涼子が麗華のどちらかを俺たちのツイン・ヴォーカルにしよう
と思ってるんだ。」

「はい？」

「はあ？」

司と”涼子”は口を開け、お互いを見つめた。

「……ってどういう事？」

司がかろうじて口を開いた。

「こいつとは」

と、『涼子』である麗華の髪をぐしゃぐしゃとして、「子供の頃
からさ音楽一緒にやってんの。こいつの親父さんとお母さんの関係
もあって。」

「はあ。」

聞くしかない司だった。

「でさ」

哲哉はにっこりと笑い、「どういう訳かこの双子ちゃんはハモっ
てもいつも同じキーに戻ってさ、結局俺が『ハモリ』役をさせられ

てた訳。」

「哲哉……」

”涼子”は目を丸くした。

哲哉は続けて、

「だから、V.O.としてもこいつはやっていける訳。即戦力になるし、こいつの親父さんもたぶん許してくれるさ。同じ音楽目指してるんだからさ。」

ずきっ！

(何、この胸の痛み。)

麗華は心臓がどくどく急に動き出した様に感じた。

(哲哉は私にとってお兄ちゃんのはずなのに。)

「でもさ、哲哉。」

司は半分呆れた様に、「同じバンド内で恋愛沙汰だなんて、問題じゃないか？」

「それだけ、仲いいって事でしょ。」

彼は動じず、「ね、『麗華』ちゃん。」

「うん。」

「こつくりと、”涼子”であるはずの麗華は頷き、そして、ふいに「え!?!??今、何て言った、哲哉!」

「だから、お前は『涼子』の方じゃなくて、『麗華』の方だろ。」

哲哉はにっこりと笑って、顔面蒼白となった麗華を見つめている。

「あ、あの……」

「え?こつちが井上 麗華の方??」

司は驚いて麗華よりも早く言った。「よく判んないな。どうして、『涼子』ちゃんが『麗華』ちゃんな訳?このクラスにいるのは涼子

ちゃんの方だろ？」

「何を思いついたのか、この双子ちゃん、『入れ替えっこ』して
みたいなんだ。」

「じゃ、今、樹と一緒にいるのが……」

「本当の涼子の方。」

「何で判ったの？」

恐る恐るという風に麗華はちじこまって尋ねた。「別に、悪戯し
ている訳じゃないだよ、哲哉。」

「それは判るよ、お前たちの性格からして。きつと麗華、お前が
お姉ちゃんに頼みこんだんだろ？理由は判らないけど。」

「そう……だけど。」

「じゃ、ツインV.O.の件も涼子お姉ちゃんと話しあってくれ
る？」

「哲哉、マジでそんな事考えてるのか？」

司は言った。

「インパクトがあつていいじゃん？な、麗華。」

「あ……」

麗華はもごもごと「私、トイレ行つて来る。」

と、言い残すと麗華は猛ダツシユで教室を後にした。

「もしもし、お姉ちゃん？」

涼子は今頃バスケ部に出る準備をしているだろう。

『何よ、麗華。これから大会に向けての練習なんだから。』

「それどころじゃないのよ！」

他の化粧を治してる生徒に聞えないように、声のトーンを小さく
し、「私が『麗華』だって事、バレちゃったのよ！」

『えーーーーー!!!???』

スマートフォンの方こうから、涼子の悲鳴が聞こえ慌てて麗華は
携帯を耳から話した。

「つて、お姉ちゃん！声でかすぎー！」

麗華は開いているトイレに入り、

「で、司君にもバレちゃって、おまけに哲哉は私がお姉ちゃんをツインV.O.にしたいって言ってるの。」

『マジ!?!』

涼子の悲鳴がまた起こった。『これから夏の大会あるし、S大の勉強もあるし、私には無理だよ。そんな気持ちもないし。』

「じゃ、断る?」

『それしかないでしょ。』

涼子が溜息をついて答えているのが判る。

「でも」

麗華は正直に言った。「私、V.O.やりたくない。」

『何言ってるのよ。成績最下位の貴方が。』

「でも、哲哉は私たちの事、褒めてくれたよ。即戦力になるって。」

『だから、そんなの無理だってば。』

涼子は念を押した。『お母さんだって許してくれないでしょう。とにかく、貴方は大学目指して勉強しなさい!』

「う……ん。」

麗華は仕方なく、携帯を切った。

(はー。いい話だったのにな……)

麗華は項垂れて、教室に戻った。

「どう?涼子の方は。」

ほとんど生徒のいない教室で哲哉と司は帰宅部の彼女を待っていた。

「駄目だつて。」

哲哉に向かつて、「第一お母さんが許してくれないだろうし、っ
てお姉ちゃん言ってた。お姉ちゃんは夏の大会とゼミで手いっぱい
だつて。」

「それみる。」

司は肩を竦めて、「今まで通りのV・a R o k kで行こうぜ。」

「仕方ないか。」

哲哉は溜息をついた。

「でも、何で私が麗華だって判ったの？哲哉。」

「そりゃ、幼馴染出し」

と、哲哉は、「白いシユシユ付けてても、もう俺にはどっちか判るよ。」

にっこりと笑った。

「あー。失敗かー。」

哲哉がそう言うのと、

「当たり前だろ？」

司が哲哉をこづいた。

「でもさ」

と、哲哉は、「デモ・テープ取る位ならお母さんも許してくれるだろ？」

「うん、それ位ならきつと……。」

元気なく麗華は答えた。

その頃、ジャージ姿に着替えた涼子は携帯をロッカーにしまい、体育館への廊下を歩いていた。

「一体、何考えてるんだか、哲哉も麗華も。」

呆れた溜息をつく。

「何、溜息ついてるの、涼子ちゃん。」

「うん、麗華がね……。」

と、振り向くとそこには樹の姿があった。

そして。

凍りつく涼子。

「今、『涼子』って……」

「そう。」

樹はにっこりと笑った。「涼子ちゃんだろ？お前は。」

がーん……

「……はい、そうです。」

申し訳なさそうに涼子は答えた。

白いシユシユはしてない。

「バスケット部に行くのは涼子ちゃんだし、その表情から言つとたぶん哲哉のヤツがツインV.O.の話を持ちだしたんだろ？」

がーん……

「はい、そうです。」

涼子は頭を深く下げた。「ごめんなさい。ちょっと色々あって麗

華と私』とりかえっこ』してたの。」

「うん。」

「だから、この間のデートも麗華じゃなくて私の方なの。」

「知ってるよ。」

「はい？」

涼子は頭を上げた。「どうして。」

「俺は麗華ちゃんじゃなくて涼子ちゃんが好きだから。」

「はい？」

涼子は目を丸くした。

「一応、告白なんだから、もう少し違う反応してくれよ、優等生

さん。」

「でも……」

「だから、『騙された』って俺は思っていないから気にしないで。」

樹は微笑した。

(マジっすか?)

涼子は固まったままだった。

そして。

「告白……って。」

「涼子ちゃんに告白したって邪魔扱いされたら困るだろ? S大目指して指揮者も目指してる涼子ちゃんに恋愛なんてしている時間ないだろ?」

確かに、そうである。

「だから、このまま入れ違いのままでも、付き合っていたかった。」

樹は優しく言った。「そして、俺たちのバンドにも加わって欲しかった。」

「そう……なんだ。」

涼子は溜息をついた。

いつか、お母さんが言っていた事がある。

(「愛」って「哀」から来てたり、「逢い」から来てるんだって言う事もあるのよ。)

涼子はその言葉を思い出していた。

(誰かに出逢って、愛して、でも切ない時もあった哀しくて……だから、愛は「哀」だったり「逢い」だったりするのよ。)

その意味が。

涼子には今、判った気がした。

「ごめん、樹君。」

涼子は素直に頭を下げた。「私が涼子じゃなくて麗華だったらよかったですね。」

「そんな事ないよ。」

樹は肩を竦めて、「音楽室でピアノ弾いていたり、かと思うとバスケ部のエースで、それが成績優秀で指揮者を目指してる。」

「うん。」

「そんな一生懸命な涼子ちゃんに俺、恋したから。違う道だけど同じ音楽で繋がっている。」

ずきん！

また、胸が痛んだ。

『違う道だけど、同じ音楽を目指してるから。』

「でも」

樹は言った。「俺はどうやら失恋したらしいな。」

「え？どうして。」

急な展開に涼子はびっくりした。

「あの、白いシユシユ。」

樹は、「いつの間にか、双子で間違えるって言って白いシユシユを君たちにあげたみたいだけど、本当は涼子ちゃんにシユシユを付けてもらいたかったらしいんだ、哲哉のヤツ。」

その台詞に、

「はい？」

涼子はびつくりした。「何で樹君がシユシユの事知ってるの？」

「あいつとは、中学からの友達だからな。」

樹は微笑した。「いつも涼子ちゃんの話しをしたよ。涼子ちゃんが生懸命勉強してるから、俺もするって。ただの、音楽好きだけじゃ終わらせたくない。夢を叶えたいって。」

「……」

「涼子ちゃんがいなかったら、今のV・Rock^{ヴァロック}はなかったかもしれない。ただの音楽好きで自己満足しているだけの。」

「おい、樹！」

そこへ、司と哲哉と麗華が走って来た。

「間に合った！練習前で。」

司は言った。「なー、涼子ちゃん。デモ・テープ取りたいんだけど協力してくれないかな？」

「へ??？」

意外な台詞に涼子は、「その話はもう終わったんじゃない……」

「お姉ちゃん、私お母さんの許可貰ったわよ！」

と、麗華が自慢げに自分の携帯を見せ、

「お母さんからメールの返事が来たの。」

そこには、

『2人供、この夏にやりたい事全部やりなさい』

そう書かれていた。

「はあ。」

溜息をつく涼子に、麗華は、

「お姉ちゃんはS大目指して勉強して。そして指揮者になって。」

「何よ、いきなり。」

「私、V・Rockのバックでもいい。ツイン・ヴォーカルに加わる！それが、この夏、私がやりたい事なの。」

彼女は満足げにっこりと笑い、「やっと自分のやりたい事が見付かったみたい。」

「でも、司は反対してたじゃないか。」
樹は言った。

「いや、あれから哲哉にMD聴かせて貰ったんだ。俺たちの曲を歌う麗華ちゃんと涼子ちゃんの。」
そう司が言うと、

「何！？そんなもの哲哉にあげたの？麗華！」

涼子は麗華に厳しい視線を浴びせた。

「怒らない、怒らない。」

麗華はどこ吹く風と気にした風もなく、

「涼子お姉ちゃん、歌なんて滅多に唄わないじゃん？だから、珍しいから内緒で録音しておいたの。」

「れーいーかー。」

「怒らない、怒らない、涼子ちゃん。」

と、哲哉は麗華の髪から白いシユシユを取ると涼子に手渡した。

「まー、もう区別は付くからいらならいだろうけど、俺からのずつと一緒にいるための”おまじない”みたいなもの。」

「哲哉……」

「涼子は指揮者、麗華はV.O.を目指す。」

「麗華ちゃんも自分のやりたい事見つけたんだよ。」

司は答えた。「だから、少し位優等生離れてこの夏は遊んでみない？違う道でも音楽を目指してる事には変わらない……哲哉の台詞だけどね。」

「司君。」

「な、涼子ちゃん。」

哲哉も微笑して、「もうシユシユ（これ）もいらなかな？俺だけの涼子はもう終わったのかもしれない。」

と、隣の樹を見つめる。

「だね。」

樹は肩を竦めた。「俺と哲哉は音楽でもライバルだし、恋争いでもライバルらしい。」

「ちよつと！勝手に決め付けないでよ！」

涼子は早口で言った。「哲哉は勉強でのライバル。樹君も同じよ。」

「でも、この夏だけは」

司は言った。「高校生活最後のコラボっていうのはどう？」

「私にはS大が・・・」

そこまで言った時、

「いた、いたー！」

雄二が走って来た。「携帯でいきなり呼び出すからまた学校に帰って来たよ。」

息をはずませ、「新しいステイク買おうと思ってたのに！」

と、麗華と涼子の姿を見つめ、

「あれ？麗華ちゃんが2人。」

「この馬鹿が・・・」

司が呆れた様に頭を抱えた。

5・司(後書き)

恋愛小説は難しいですね〜。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6481y/>

愛って「哀」のこと？「逢い」のこと？

2011年11月20日20時08分発行